

マ6世を多面的な人間と捉え、王の多面性を疎漏なく捉えようと努力したことが、幸いしているように思われる。更に本書は、当時生じたいくつかの重要な歴史的な事象を明確に解き明かしている点で、貴重な文献になっている。タイの王朝で、はじめて外国留学の経験をもった国王であり、しかもその留学期における王の socialization が、タイ政治史の上で一つの重要な転変の契機となっているだけに、本書の冒頭の留学についての叙述は、たいへん参考になる。そのほか、1912年に生じたいわゆる「ラタナコーシン歴130年の革命」についての記述は、その革命が、たとえ失敗したとはいえ、タイの絶対王制にたいする近代官僚の最初の革命的反逆であっただけに、貴重なデータを提供してくれているし、また有名な「スアパー義勇隊」について、国王がどういう考えをもっていたかも、本書でよく示されている。

ラーマ6世にたいする著者の態度は、タイトル——「哲人王」を意味する——が示すようにたいへん好意的である。ラーマ6世の御代は、本書においては、チャクリ王朝史の黄金時代と捉えられている。ラーマ6世が犯したさまざまな失政は、本書ではかならずしもはっきりしない。その点は、Chula Chakrabongs らの英語文献、あるいは Thai Noi らによるタイ語の伝記によって補足する必要があるだろう。それにも拘らず、本書は、現段階におけるラーマ6世の研究としては、最先端を切るものであり、内容の水準も高度であるからには、見逃せない一書であると断じうる。巻末にまとめられた参考文献目録は有益だし、そして、本書は、巻末に索引を備えている点で、タイの本としては、稀有の範疇に属するといえる。（矢野 暢）

Chalao Chaiyaratana. *Let's Speak Thai*. Bangkok: The Social Science Association Press of Thailand, 1965. 188p.

本書は、タイ人の言語学者によって書かれた、外国人（主として英語を母国語とする）のための、タイ語入門書である。題名から察せられる様に、実用一点ばりの練習用の書物であるが、その基礎は、現代アメリカの構造言語学にもとづいて作られた、まじめな本である。タイ語について、タイ人の言語学者によって書かれた実用的な練習用の本では、本書が最初のもので

はないかと思う。

著者は、MIT において Applied Linguistics で Ph. D. を取り、現在タマサート大学教養学部言語学科の Head をつとめると同時に、自身の Chalao Language Institute においても、活ばつに言語教育を進めている。タイ国における、この分野での代表的人物と言えるだろう。本書の他にも、タイ人のための英語のテキスト類やレコードなど、数多く出版している。タマサート大学では、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、日本語が教えられているが、どの授業も著者流の Intensive Method でつらぬかれている様である。

本書の全部が文型及び句構造の練習より成る。全体で32の文型を設定し、その各々を一つの Chapter として多数の例をあげて練習に供すると同時に、句構造として、Noun Phrases と Verb Phrases とを説明し、その各々の型につき練習用の例をあげる。これらの文型及び句構造を一見すると、本書は Transformational Analysis の理論を基礎としていることがわかる。Noam Chomsky を中心としてアメリカで展開された Transformation の理論は、色々な面でその有用性を発揮しているが、これはその理論がタイ語に応用された好例であろう。なお、本書では、タイ文字はいっさい使用せず、すべてローマ字による音素表記が用いられており、根本的には Mary Haas の *Spoken Thai* の表記法と同じものとみてよい。

本書は、もともと、教室で使用する Text として作られたもので、独習用のものではないから、別にこん切ていねいな説明というものはない。したがって、本書でタイ語を学習する際には、少くとも最初の一定期間は、適当なタイ人について勉強する必要があるだろう。ただ、最初のコツを得てしまえば、あとは何も考えずに自分でどんどん進むことが出来るだろう。本書を完全に仕上げれば、一応の Speaking には不自由しないと思う。最後に、問題に思う点は、これを Text に使用した場合、習う方の者に相当な忍耐力がなければ、最後まで続かずに落伍する者が多く出るのではないかと言うことである。全体が文型という文法的な Pattern のみにもとづいて配列されているため、各文の内容の間には何のつながりもなく、ただ同じ Pattern に属する多くの文を次々と練習して行くのであるから、どうしても、「アキが来る」きらいがあるだろう。私は、むしろ、本書は教師用の整理ノートの様なものと

して使用し、実際に教室で使用するには、もう少し形  
のちがった、内容的にも興味を持てるものにした方が  
よいと思う。あるいは、*Spoken Thai*などで一応基礎  
的なタイ語をやった者が整理のために本書を使用する  
のなら、大いに有用であろう。なお、かなり誤植が多  
く、急いで製本した様な印象を受ける。(桂満希郎)

David D. Thomas et al. *Mon-Khmer  
Studies I*. Saigon: 1964. 163p.

Linguistic Circle of Saigon といっても一般には知  
られていないが、本書によると、南ベトナムの Saigon  
大学と米国の Summer Institute of Linguistics のメ  
ンバーによる研究会であるらしい。本書は、その研究  
会が1963年秋にユエ (Hue) で行なわれた際に読まれ  
た原稿をまとめた論文集である。著者は、編者として  
Introduction を書いている米国 North Dakota 大学の  
David D. Thomas を除いては、John and Elizabeth  
Banker, John and Carolyn Miller, Richard and  
Saundra Watson というこれまでほとんど無名であっ  
た人たちがばかりである。

本書で扱われている言語は、南ベトナムで話されて  
いる3つの少数民族の言語、すなわち Bahnar 語、  
Brou 語、Pacoh 語であって、いずれも東部モンクメ  
ル系統に属する。この系統の言語は、ラオス、ベトナム、  
カンボジアに様々な種類が分布しており、比較言  
語学的にクメル語を考えるうえで欠かせないものであ  
るにもかかわらず、事実上ほとんど未開拓のままであ  
った。その意味で本書の出現はまことに喜ばしいこと  
に違いない。ことに、このうちの Brou 語と Pacoh 語  
は今まで単にその名が知られていただけであった。

もっとも本書からはこれら3つの言語の断片しかわ  
からない。各論文とも記述的な研究であるが、短い論  
文であるうえ、取上げた問題も方法も異なっていて、全  
体としてひとつの言語の構造がわかるという体裁のも  
のではないからである。すなわち、Bahnar 語につい  
ては、(1) Clause Paradigm, (2) Affixation, (3) Re-  
duplication, Brou 語については、(1) Word Classes,  
(2) Substantive Phrase, Pacoh 語については、(1)  
Pronouns, (2) Phonemes が、それぞれ述べられている。

本書の主眼とする所はむしろ様々な記述方法の適用

例の提示ということにあるようである。たとえば、  
Bahnar 語の Clause Paradigm には transformational  
battery が、Brou 語の Substantive Phrase には  
tagmemic approach が用いられるという具合に。し  
かしこの場合、battery とか tagmemic, tagmatic と  
かいった術語に対して、十分な説明や定義がほしいも  
のである。これらはまだあまり熟していなかったり、  
学者によって用法が同じでないものだからである。

比較言語学的な論文としては Thomas によるモン・  
クメル語比較研究の展望があるのみであるが、まさに  
その中で述べられているように、この系統の言語の比  
較研究を困難にしている最大の原因は音素論的基礎の  
欠如である。それは本書の対象となっている言語につ  
いてもあてはまることである。

ともあれ、Schmidt より半世紀以上もたった今日よ  
うやく、しかしここ数年来にわかに、モン・クメル語  
の研究が活発になったことは事実であって、本書も  
またそのひとつの現われなのであろう。(三谷恭之)

Udom Warotamasikhhadit. *Thai Syntax:  
An Outline*. A Dissertation Presented to the  
Faculty of the Graduate School of the  
University of Texas. Bangkok: College of  
Education Prasarnmitr, 1963. v+70p.

タイ人によって書かれたタイ語に関する本というの  
は、一口に言えば、いかにして正しいタイ語を使用す  
るかという規範的なものがほとんどであった。しか  
し、最近になって、タイ人の若い学者で、主としてア  
メリカの記述言語学の方法を身につけ、それでもって  
タイ語を記述説明して行こうという人達が出て来てい  
る。本書はその代表的なものといえるであろう。した  
がって、本書はタイ語の規範を示すものでもないし、  
これでもってタイ語を勉強しようとしても全く無駄で  
あろう。言いかえれば、「いかにタイ語を使用すべき  
か?」ということは一応別にして、「タイ語とはどう  
いう構造の言語か?」ということを明らかにしようと  
するものである。

アメリカの構造言語学においても、従来の方法では  
説明し切れなかった多くの点を説明することのできる  
新しい言語理論として現れたのが Noam Chomsky,  
Emmon Back 等を中心とする Transformation の